

G.W.F. ヘーゲル，尼寺義弘訳『自然法および国家学に関する講義

——1817/18 冬学期講義，ハイデルベルク——
——1818/19 冬学期序説(付録)，ベルリン——』

小 松 善 雄

I はじめに

——なお窮めるべき古典

ヘーゲルの『法哲学』（『法の哲学 要綱，自然法と国家学 要綱』）は，近代の社会科学がそこから生まれ育っていった最重要な理論的根基の一つであるとともに，現代にあっても社会科学の発展を志す者が幾度も立ち帰って紐解くべき滋養分溢れる基盤＝土壌でもある。とりわけ周知のようにマルクスにあつてマルクスがマルクスなる最初の出発点は『ヘーゲル国法論〔第261節－第313節〕の批判』であつた。ヘーゲルが『法哲学』で打ち立てた《市民社会と国家》^{プロブレマティーク}という問題構成こそが史的唯物論の出生の秘鑰であつたのであつた。

古典はいつも時代の課題との対決から読み直される。一例を挙げるならば，ファシズムがヘーゲルを楯としたときに，マルクーゼが「ヘーゲルの基礎的な諸概念が，ファシズムの理論および実践にみちびいた諸傾向とは敵対するものであることを論証」（1941年，柘田啓三郎他訳，岩波書店，1961年。「序」）すべく『理性と革命』においてそれを試みたように。

このような古典中の古典であるがゆえに，この著書についてはわが国でも戦後に限っても，藤野渉・赤沢正敏訳『法の哲学』（世界の名著44 中央公論社，1978年）のほか，高峯一愚『法の哲学－自然法と国家学』（創元社，1954年，論創社，1983年），三浦和男他訳『法権利の哲学－あるいは自然法的権利および国家学の

基本的スケッチ』（未知谷，1991年）とそれぞれ特色のある3種類の訳書が刊行されている。また最近，藤野・赤沢訳の『法の哲学』が中公クラシックスに収められ，新書版『法の哲学Ⅰ・Ⅱ』（中央公論新社，2001年）として入手できるようになった。

II 到来した法哲学研究の文献的画期

もっとも『法の哲学』のテキストに関していえば，1820年12月に公刊された『法哲学』にヘーゲルの死後，弟子のガンスが「1822/23年冬学期講義（ホトー・ノート）」，「1824/25年冬学期講義（グリースハイム・ノート）」とヘーゲル自家製本の書き込みをもとに付した「補遺」からなるベルリン全集版がこれまでスタンダードとして広く流布されてきたが，ヘーゲルの国家・法論の全貌をうかがうためには，まずは「本文」と「補遺」を分離するだけでなく，ヘーゲルがハイデルベルグ大学において1817/18年冬学期におこなった「自然法と国家学」講義以下，すべての講義の公刊が望まれていた。

いま，早瀬明「ハイデルベルグならびにベルリン時代の法哲学講義聴講ノート」（加藤尚武編『ヘーゲルを学ぶ人のために』世界思想社，2001年）によってその一覧を示しておくと，次のようになる。

〔第1回〕 1817/18年冬学期講義……P・ヴァン
ネンマン

〔第2回〕 1818/19年冬学期講義……C・G・ホ

晃洋書房，2002年，325ページ。

ーマイヤー（法典論争をめぐってヘーゲルと対立する立場にあったサヴィニーの弟子。第16節まで〔序論部分〕は、P・ヴァンネンマンのノートも存在する）

- 〔第3回〕 1819/20年冬学期講義……姓名不詳
- 〔第4回〕 1821/22年冬学期講義……姓名不詳
- 〔第5回〕 1822/23年冬学期講義……H・G・ホトー（『法の哲学』第100節から第341節までの部分については、同じ講義を聴講して作成されたと推定されるK・W・L・ハイゼの比較的短い〔『法の哲学』への〕書き込みも存在する）
- 〔第6回〕 1824/25年冬学期講義……K・G・v・グリースハイム
- 〔第7回〕 1831/32年冬学期講義……D・F・シュトラウス

これまでのイエーナ期の精神哲学（尼寺義弘訳『イエーナ精神哲学』阪南大学翻訳叢書15, 晃洋書房, 1994年。加藤尚武監訳『イエーナ体系構想 精神哲学草稿Ⅰ（1803-04年）精神哲学草稿Ⅱ（1805-06年）』法政大学出版局, 1999年）と1920年の『法哲学』執筆とのあいだに、いかにヘーゲルの国家・法論が成熟したかという法哲学成立史に関しては知られざるままであったが、K・H・イルティングが1973-74年に第5回、第6回、第7回の法哲学講義を公刊、1983年にイルティングが第2回講義を、ヘンリッヒが第3回講義を、さらにヘーゲル・アルヒーフとイルティングが第1回講義を公刊したことによって成立史、したがってヘーゲルの国家・法論の全容を知ることができることになった。すなわちヘーゲル法哲学研究の文献的画期の到来である。したがって1980年央以降、ヘーゲルの法哲学について何事かを語ろうとする者は、これらに即かなければならなくなったのである。

それではこれらの講義ノートの文献学的信頼性はどう評価すべきであろうか。イルティングは「ヘーゲル法哲学の生成」(Ilting, “Zur Genese

der Hegelschen »Rechesphilosophie«, *Philosophische Rundschau* 30. Jahrgang Heft 3 / 4, 1983)において、次のように述べている。

「まず第3回講義に関しては、『筆記録の最初の部分は注目すべき未熟さによって際立っている。その筆記者は講義開始時には述べられた事に対し特別な関心を抱かなかつたし、十分理解もできなかった。』そして、『この氏名不詳の筆記者による講義録は、いっそう能力が乏しい筆記者によって書き写されているに相違ない。』従って、第3回講義の筆記録には『恐らくは講義そのもの以上に……遺憾な点が多い』(Ebd., S.169f, 173.). これに対し、第1回講義筆記録は『疑いなく、従来知られていた全ての筆記録の中で哲学的に最も内容豊であり、かつ文献学的に最も信頼できる』ものであって、それは口述筆記された本文のみならず、注解部分についても当てはまる」(Ebd., S.169, 173.)」(権左武志「ヘーゲル法哲学講義をめぐる近年の論争（2・完）」『北大法学論集』第41巻第1号, 1990年, 162ページ）。

L・ジープも書評「ヘーゲルのハイデルブルク・法哲学」(L. Siep, “Hegels Heidelberger Rechtsphilosophie,” *Hegel-Studien* Bd.20, 1985)においてその文献学的信頼性について「この第1回講義筆記録は『ヘーゲル法哲学講義の中でもっとも重要な筆記録』であって、それは『テキストの意味及び信頼性に関して十分な根拠を持っている』(S.283)。まずテキストの意味について言えば、この筆記録は1817年冬学期において既にベルリン『法哲学』の思想の概略が完成していたことを明らかにしており、これはヘーゲルが公刊した同時代のテキスト——1817年の『エンチクロペディー』及び『領邦議会論』——から従来うかがい知ることが出来なかった。次に、このテキストは以下の3点の理由によって他の筆記録よりも高次の信頼性を有している。第1に、ヘーゲルの弟子カロヴェは1841年3月のハレ年報において第1回法哲学講義中の137節及び140節（本文）を引用しているが(F. Nicolin, “Hegel über konstitutionelle

Monarchie,” *Hegel-Studien* Bd.10, 1975, 79-86.), これはヴァンネンマンにより筆記された第1回講義録の該当箇所と完全に一致している。第2に, この第1回講義録とホマイヤーにより筆記された第2回講義録との間で, 特に序論(本文)に関して一致が存在する。第3に, 『法哲学』に比して最も大きな相違を示す国内公法の部分については, 『領邦議会論』に基づく検証が可能である。このようにジープは第1回講義の意味及び信頼性について基本的にイルティンクに同意するが, 同じ筆者ヴァンネンマンにより筆記された続く第2回法哲学講義の序論(注解)部分(“Einleitung-nach der Vorlesung im Wintersemester 1818/19 in Berlin,” in VW 269-280.)はホマイヤーによるそれとは相違している以上, 第1回講義の注解部分に対しては十分な信頼を置くことは出来ないと考える」(同上, 166-167ページ)。

みられるようにイルティンクもジープも第1回のハイデルベルグ・法哲学講義ノートについては, とともに高次の信頼性をもつと評価している。

そして, このハイデルベルグ大学での1817/18年冬学期講義と1818/19年冬学期講義の序説部分を本邦ではじめて翻訳したのが, 尼寺義弘訳『自然法および国家学に関する講義—1817/18年冬学期講義, ハイデルベルグ 1818/19年冬学期序説(付録), ベルリン』(阪南大学翻訳叢書17, 晃洋書房, 2002年3月)である。しかも——これが尼寺氏の尼寺氏たる所以なのであろうが——氏はヘーゲル・アルヒーフ版とイルティンク版とを参照しつつも, この訳業にさいしては, ドイツ留学中の2月, シラーナショナルミュージアム所蔵のヴァンネンマン手稿に直接当たって確認する労をとられていることである。それだけに翻訳としても信頼度は高いというる。

Ⅲ ハイデルベルグ『法哲学講義』の学問的意義

——ヘーゲル・マルクス問題の一端に関連して, 一つの読み方——

そこでこの訳書の学問的意義であるが, 当然, ヘーゲルの法哲学を研究する者はまずもって原『法哲学』というべきこの書を基礎に捉えて現行版の『法哲学』を読むことが必須の作業になる点が指摘されなければならない。実際にも現行版の『法哲学』ではふられない独自の論述があるばかりか, 現行版の『法哲学』では理解しにくい箇所についていっそう立ち入った説明が与えられていることによって奥行きのある理解が得られるという叙述が随所に存在する。

ここでは私自身の問題関心——ヘーゲル・マルクス問題に関連して興味深く思われた若干の叙述を紹介しておこう。

その一つは, マルクスの労働過程論との関わり合いである。「I 抽象法 一 占有と所有」の「§21」, 「§22」には, 次のような論述が見られる。
「形成することはもつとも本質的な占有取得であり, 占有はそれによって継続され, 占有取得は収益となる。形成することに農地の耕作, 作物の種蒔きと栽培が, 同様に, 動物を飼い馴らすこと, えさをやることに属している。[……]

形成することによって私は物件に私のものという術語を与えます, 他人はそれを支配することはできません, なぜなら形成することは, 述語は, 私の意思であるからです, そして他人が私からこの物件を奪ったならば, 彼は私の自由を奪ったことになります。[……] たいていの場合私は私の使用のために物を形成し, そして私の使用のためという合目的性が, それは私の物であるべきであった, という私の意思を表現します。[……] 野獣は自立的なものです, それは飼い馴らすことによってその自立性を失います。しかし人間の教化はまさに自由のための意味を作りだします, そして食料による人間の

維持という単なる生活は、人間にあっては主な事柄ではありません。ある物を利用するということは全体にそれを破壊することです、人をそれを消耗し、手段とすることによってです。大地の利用においてふたたび衝突が生まれます、大地は具体的なものであり、多様な仕方を利用されうることによってです、〔……〕遊牧民と狩人は大地を完全には占有しません、そして形成することが始めて、したがって大地を耕作することが、独自の占有を与えます」（以上、S 21, 24-25ページ）。

ここには『資本論』第I部第3篇第5章第1節「労働過程」における労働＝「合目的的活動」論（社会科学研究所版『資本論』I a, 新日本出版社, 304-305ページ）と『経済学批判要綱』中の「資本主義に先行する諸形態」における「本源的所有」論（『資本論草稿集』②, 大月書店, 143-145ページ）とが未分化であるが、プロトタイプの意味合いをもって語られている。

つづいて「S 22」では、さらに、こういわれている。「さらにここには人間の独自の肉体および精神の教化が属している、そして熟練と技倆の獲得がそれに属している。私はこの陶冶によってはじめて私の中にある普遍に可能性あるいは能力を、規定性および自己からの区別を与え、そしてこの訓練によって活動の特定の仕方を習慣とし、私はその仕方を占有取得し、そして私の目的の妨げられることのない実行のために、その仕方についての師匠となる。

技倆の獲得も形成することによる占有取得ですし、私のなかの能力は可能性です。しかし私は可能性を教化することによって、私は普遍的な可能性を特殊なそれとします、そして私は形成するという活動性を普遍として私から分離しなければなりません。〔……〕精神の本質は有ではなくて、活動性によって自己を定立することです。私は私を陶冶することによってはじめて私は私の活動性の師匠となります、そして私はその活動性を、私は加工しようとする対象にふさわしく完成させることができるのです。形

成することによって私は私を規定し、私は特定の活動性を私から分離し、そしてこの特殊化、熟達ということが私に属し、そしてそれらは単に私がもはや同一性にとどまることはない、ということによってのみ存在しているのです」（26-27ページ）。

この「形成」による「人間の独自の肉体および精神の教化」という思想のうちには、まさに「労働過程」論において「人間は自分の肉体に属している自然活力の運動によって、自分の外部の自然に働きかけて、それを変化させることにより、同時に自分自身の自然を変化させる」（前掲I a, 304ページ）という一句と符節を合わせたように同質の思想内容が示されているといえる。

なお「II 道徳 一 行為と心構え」の「S 55」の講義には「動物は本来は何らかのことをすることはできません。意志はその実現の前に自己のうちに目的をもっています」（76ページ）という一句があり、目的定立・合目的的意志をもつという点で人間の行動は動物のふるまいと区別されることが述べられている。

さらに、「III 人倫態 二 市民社会 (A) 欲求の体系 国家経済学」のうちの「S 100」では、いわゆる「理性の狡智」が道具論に即して平明に説述されている。

「人間における理性性という性格は彼が用いている手段、道具において示されます。道具によって活動は、さらに特殊化されます。道具によって人間は自己と自然との間に手段を差し入れ、そして彼が手段を利用するにまかせ、そして自己自身をそのように維持する、そうすることによって彼の諸力の消耗を防ぐのです。理性的なことは一般に自己を維持すること、自己を変化から取り除くことです。理性はこの媒介を道具によって発明しました、そして自己維持はこの媒介を人間の義務とします」（152ページ）。

このようにみえてくると——マルクス自身がハイデルベルグ『法哲学講義』を知っていたかどうかという文献的考証はさておくとしても——

従来、マルクスはヘーゲル哲学からその觀念論的内容を退けて「方法」=弁証法的方法を唯物論的に転倒して継承したというのが通説であるが、ヘーゲル左派の思想圏内にあってヘーゲルの「エンクロペディ」の百科全書的博識のうちにみいだされる積極的・唯物論的知見そのものをマルクスが実質的に摂取しているという側面がもっと注目されてよいのではないかと考えられる。

その二は、ヘーゲルのマニファクチュア論・機械論である。「二 市民社会」の「§101」は現行の『法哲学』にもみられない、いっそう詳しい論述がみられる。やや長いが、当該節の全文を引用しておこう。

「特別な手段の準備は、個人がそれらの一つに自己を限定しなければならないところの、特殊な技倆と習慣をさらに要求する、それとともに分業が登場する、分業によって具体性を失った〔労働の多様は〕抽象的で、単純で、より容易なものとなり、かくして同じ時間に非常に多量の生産物が生み出されうる、もしも労働がその究極の抽象に到達した場合には、その労働は単純性によって機械的となる、そして人間は彼の代わりに機械を登場させることができる、彼はそこで彼の代わりに自然の運動の原理を活動させ、それを同じ形式性と彼の目的のために調整する。

あらゆる工場の労働と工場制手工業の労働はこれに基づいており、各々の個別の操作は個別の個人に割り当てられます。10人からなるごく小さな工場において、この10人が1日につき4800本のピンを製造します、そしてもしも1人の個人がすべてのことを自分1人で行うとすれば、彼はせいぜい20本のピンを製造できるのが関の山です。表象の主観的な切り替え、および労働のそれ、この移行は一定の時間を、そしてもしも個別の主体がずっと同じ操作を行う場合よりも、より多くの時間を必要とします。かくして労働は抽象的で、一様なものとなり、そして労働は、仕事の修業が唯一のそれとなり、個々の主体が行うところの知識も唯一の知識で

あることによって、一層容易となります、かくして個々の主体はこうした個々の操作において、一層多くの器用さを手に入れることができるのです。いずれの職人も今より具体的な作品を生み出します、彼はしばしば移行していかねばなりません。そして彼の知識は多様でなければならない、多種類の対象について広がっていかねばなりません。工場の労働者が鈍感となり、そして彼らが工場に結びつけられ、それに依存するのは、上述のことに基づいています。彼らがもしそうしなければ、こうした個々の技倆によってはどこでもやっていくことができないからです。そしてそれは工場のなかの人間の鈍磨さの悲しむべき像です、したがって日曜日ごとにいつも週賃金全部をすぐに浪費してしまうのです。しかしもしも工場労働がかように改良され、かように単純化されると、人間が機械のように労働することに代わって機械が働くことができます、そしてこれは工場における普通の移り行きです。かくして人間はこの機械の経過の完成によって再び自由となるのです。人間がそこではひどい貧困のうちにあり、そして乏しいものに甘んじねばならないところの国において、工場はとりわけ成功します。しかしイングランドでは労働者はとても高価です、そしてそれにもかかわらず工場は非常に成功をおさめています、機械類が人間の労働なしですまさせているからです。かくしてイギリス人は、労働者がそこで非常に安価な他の国の諸国民よりもより安価な商品を生供給することが出来ます。人間によって用いられるところの機械的な道具も、それらが人間のあらゆる活動を必要としないで、機械装置が大きな力の代わりとなっていることによって、それらもまた機械です。しかしあらゆる機械的な運動では、一様性は持続しません。時計のぜんまいは始めはいつも後と比べてより強く緊張しています。そして人間の運動の一様性を入れなければなりません。人間はしたがってはじめは犠牲とされます、そしてつぎに機械類のより高い程度によって再び自由となります」(152-154ページ)。

ここには遺憾なくヘーゲルの経済学への研鑽ぶりが証示されているといつてよいように思われる。旧来、ヘーゲルの経済学の知識はスチュアートの『経済学原理』についてノートを取っていたこと、アダム・スミスの『国富論』を繙読していたことは知られているが、ここで提示されている問題把握は、それらのレベルを超えている。

ここでヘーゲルはアダム・スミスの『国富論』の著名なピン・マニファクチュアの事例を掲げつつ、マニファクチュアの段階で、肯定面としては早くも人間の多面的発達^{オートマツト}が要請されるとともに、否定面としては分業による一面性のため人間の鈍磨も生み出されることをふまえ、機械の登場・発達はそれらの肯定面・否定面の揚棄において人間の自由を再建すると捉えられている。ここにヘーゲルは1830年代半ばとされるドイツにおける産業革命の開始以前にマニファクチュアの経済学者ではなく機械制大工業をも透視している経済学者として立ち現われているといえる。

もっともヘーゲルにあつては人間労働にとつての機械の解放的意義の全面的な発揮が現体制においてなされるのか、それを超える体制のもとでなのかという問題意識はいまだない。とはいえ、ここでの問題把握はマルクスの『哲学の貧困』における自^{オートマツト}動工場論——「自動工場における分業を特色づけるものは、そこでは労働が専門という特性をいっさい喪失してしまったということである。ところで、いっさいの特殊的な発展が停止するやいなや、普遍性の欲求が、個人の全体的な発展への傾向が、感知されはじめる。自動工場は種と職業白痴を抹殺する」(高木佑一郎訳, 国民文庫, 192ページ)という透徹した認識——後年の『資本論』第1部第4篇第13章「機械と大工業」の「全面的に発達した諸個人」の生成論につながる認識——の先縦の位置を占めているともみられよう。

第三はその市民社会論である。ヘーゲルは「Ⅲ 人倫態 二 市民社会」の冒頭の〔S 89〕で、市民社会の基本的特徴づけを、以下のよう

に与えている。

「市民社会における普遍性というものは、さらに詳しく言えば、個々人の生計と福祉とがあらゆる他の個人の生計と福祉とによって条件づけられており、そしてそのなかへと編み込まれている、という具体的な規定をもっている。この共通の体系のなかで個人は自己の実在をもち、そして自己の現存在の外面的な確実性も、その法的な確実性ももつのである。市民社会はかくしてまず外面的な国家、あるいは、悟性の国家である、というのは普遍性はそれ自体として即自・向自に目的ではなくて、個々人の現存在と扶養のための手段であるからである、あるいは、市民社会は必要国家である。というのは諸欲求の確実さが主要な目的であるからである。

市民社会はここではブルジョア〔市民〕であり、シトワイアン〔公民〕ではありません、個人は彼の福祉を彼の目的としています、彼は法的な人格です、法のモメントが普遍性において現れます。とはいえ個人の福祉と生計はすべての個人の福祉と扶養によって条件づけられています。個人は自己のことだけを配慮します、個人は自己だけを目的とします、しかし個人は、彼がすべての個人のことを配慮し、そしてすべての個人が彼のことを配慮しないことなしには、自己のことを配慮することはできないのです。利己心という彼の目的によって彼は同時にまた他人のために労働するのです。ここではあらゆることが契約にもとづいており、所有のあらゆる獲得もそうなのです。いずれの生産物も多くの他の個人の生産物であり、私の諸欲求を充足するところのそれぞれの生産物はこの鎖を前提としています。各人は彼の労働が人によって必要とされるであろう、という信頼のもとに労働しています。ここは個人の目的が一方で普遍性をももつという媒介の領域です。とはいえ普遍のための生命一般はなおここでは存在しません。ここでは個人の生計と権利が目的です。ここで妥当する普遍性は抽象的な普遍性にすぎないものであり、単に手段である普遍性です、

したがってこれは悟性国家のことで、権利を獲得するということの目的は欲求を充足することにあります、すなわち特殊な所有としての所有の保護と現実性が必要国家の目的です。家族の統一は解体されており、家族の人倫的な関係は分解されています。そして必要国家は人倫的な国家ではありません。家族は実態的なものであり、対立するものを克服することによって家族は、即自・向自に存在する人倫態へと自己を昇華しなければなりません。家族の対立するものの段階は必要国家であり、抽象的な普遍性です。ここでは自立した者としての一方的な者は、彼の欲求のために配慮しなければなりません。この欲求が必要を構成します、そしてこの必要は一般的な関連において充足のみを見つけだすのです」(136-137ページ)。

ここで注目される点としてさしあたり2点、挙げられる。

その第1は、ヘーゲルが「ブルジョア」(市民)とシトワイアン(公民)を概念的に区別し、「市民社会」(ビュルガーリッヒ・ゲゼルシャフト)における諸個人を「ブルジョア」の規定性において捉えていることである。

この「ブルジョア」と「シトワイアン」との区別はすでに『イエーナ精神哲学草稿』(草稿II)、(前出尼寺義弘訳『イエーナ精神哲学』102-103ページ、前出加藤尚武訳『イエーナ体系構想』211-214ページ)にも実質的にヘーゲルの法哲学の最終講義となった1824-25年冬学期講義(グリースハイム・ノート)(長谷川宏訳『ヘーゲル法哲学講義』作品社、2000年)の「第二章 市民社会」の冒頭(邦訳、364ページ)にも見えている。

マルクスは『ヘーゲル国法論批判』においても、当然このブルジョアとシトワイアンの区別を前提にしており、『国法論批判』では、ヘーゲルの「論理的汎神論的神秘主義」、理念からの現実的諸関係の導出という転倒を批判しつつも「市民社会の理念が展開する場であるような人間群は市民(Bürger)であり、そうでない人間群は公民(Staatsbürger)である」(国民文庫、

71ページ)というように確認されている。そして周知のように「ユダヤ人問題によせて」においては、ブルジョアとシトワイアンの区別をキー・コンセプトとしてフランス革命におけるジャコバン派の急進的な1793年憲法にあつてさえ、「公民(citoyen)としての人間ではなくて市民(bourgeois)としての人間が本来的な真の人間と解される」(同上、307ページ)にいたっている限界——政治的解放の限界を乗り越えて「現実の個別の人間が抽象的な公民(citoyen)を己のうちに取り戻す(zurücknehmen)」ことによる人間的解放(同上、313ページ)を提起したのであった。

第二は、市民社会が「外面的国家」=「悟性国家」=「必要(強制)国家」として捉えられていることである。この規定は、現行版の『法哲学』の「第三部 倫理 第二章 市民社会」の「§183」において市民社会=「全面的依存性の体系」は「さしあたり外的国家——強制国家および悟性国家(1)とみなすことができる」(藤野/赤沢訳、『法哲学II』中公クラシックス91ページ)といわれている。

そして藤野氏ら訳者は、この1節に、つぎのような補注を付している。

「市民社会においては普遍性と特殊性とは分裂しており、両者の実体的一体性は内的必然性であるにすぎない。だから市民社会は本来の国家に対して外的国家ないし外面的国家(§157)と呼ばれる。また、市民社会の各人はおのれの特殊欲求の充足を唯一の目的とするが、この目的を実現するためには各人は必然的に形式的普遍に則らざるをえない。つまり特殊と普遍との関係は、自由ではなくて必然的である(§186)。だから市民社会はまた強制国家と呼ばれる。ところで普遍と特殊とがこのように相互に分離されて固定されるのは、市民社会では理性が現実性をもつていず、理性のこの有限性の圏への映現としての悟性が支配しているからである(概念諸契機を分離して固定するのが悟性の悟性たる所以)。だから市民社会はまた悟性国家と呼ばれる。ヘーゲルは『フィヒテとシェリ

ングの哲学体系の相違』(1801年)において、『自然法の基礎』(1796年)におけるフィヒテの国家を『強制国家』(ノート・シュタート)とか『悟性の支配下にある共同体』と呼んで批判した。フィヒテの体系では、抽象的自由の揚棄は『自由の自由な制限』とはみなされないで、『制限が、共通意志によって法律に高められ、……生き生きとした関係は悟性によって拘禁されている。こうした強制状態が自然法だと主張され、この状態を揚棄することが最高目標であるというふうには主張されない』(全集第1巻108～115ページ参照)。『ノート』の原義が『強制』、しかしヘーゲルは『窮乏、必要』という普通の意味でもこの語を使用している」(91-92ページ)。

この補注ではヘーゲルの1801年の『フィヒテとシェリングの哲学体系の相違』においてフィヒテの『知識学の原理による自然法の基礎』(1796年、藤澤賢一郎他訳『フィヒテ全集第6巻 自然法論』哲書房、1995年)の国家論を「強制国家」(ノート・シュタート)、「悟性の支配下にある共同体」と呼んで批判したと記されているが、この把握は、このハイデルベルグ『法哲学講義』では、『相違』以上にフィヒテの国家が「必要国家」といわれるべき所以が明確に説明されている。すなわち同じ「市民社会」の「c ポリツァイ」の「§119」で、以下のよう

に口述している。「犯罪は罰せられるべきですが、しかし犯罪者についての知識の側面および彼の捕縛の側面は警察の任務です。これは法廷それ自体にとってふさわしいものではありません、というのはポリツァイはここではあたかも犯罪者の敵として登場し、あらゆる可能な仕方ではしばしば狡知によって犯罪を発見しようと努めており—そして法廷は犯罪者の尊厳を何ら損なうことはない—そして犯罪者を捜し出すことは主観的なことであり、そしてこの詮索はなお公正さを含んでいるわけではありません。犯罪は偶然的な行為とみられるべきです、そして個人は邪悪なものであるということは偶然的なこととみられね

ばなりません。自己に積極性を与えようとする無効性は犯罪です。ポリツァイはかくして犯罪を阻止すべきです。悪は生ぜさせるべきではありません、そして悪を阻止する権力機構が現存すべきです。これは必要国家の有機的組織に属する当為の立脚点です。フィヒテの国家はポリツァイを中心的な任務ととらえ、そしてこれをとくにさらに敷衍しようとします、しかし彼の国家は必要国家です。かくしてフィヒテは、誰も自分の身分証明書なしには出発することができない、と述べています、そして彼はこのことを犯罪を防止するために非常に重要なことと考えています。しかしこの国家は、ある人が他の人を常に監視していなければならない、そうした本当のガレー船となります。ポリツァイのこの監督はしかしそれが必要である以上に広げられてはなりません。しかしこれらの必要な段階が生まれたときにはそれはたいいの場合明確なものではないのです。かくしてポリツァイは特別の命令なしには家庭に入り込むべきではないということが言えるでしょう、なぜなら家庭の内部の行いは監視されてはならないものであるからです。同様に、いたるところで警察官を見るとすれば、このことは不快なことです。秘密警察がそこでは最上のことでしょう。人は秘密警察がそれがなお必要とされる監督を行っているということを見るべきではないのです。しかしこの隠されたものは、公的な生活は自由であるという目的をもっています。虚偽であるということおよびあらゆる可能な仕方では誰かを逮捕するという、その警察官の心構えは抑圧されてもならないし、また育まれてもならないのです。—ロンドンでは人はその職務が犯人を追跡することではなくて、犯人を捕らえた人に対して褒美を与える、そうした人々を用いています、これらの人々、すなわちポリツァイのスパイはポリツァイの主観的な利害から警察官であろうとはしません、そして彼らは自ら犯人を作ろうとします、あるいは犯罪をでっち上げようとするのです。個々に貧しいアイルランド人が彼らがなしたこと、すなわち贖金を作られ

たということを知ることなしに逮捕されたということが起こったのです。このことから腐敗の最大の深みが生まれうるのです。—ポリツァイはかくしていくつかの厄介ごと、たとえば身分証明書の検査を指示しなければならないのです。この服務規定は必然的に現存しています、そして初めてその規定を実行した人は、それを義務から行っているのです、人が心構えの事情をそこでは見いだすことはできません、(人は人を検分します、というのは人はまともな人間であると考えているからです) そうではなくて私は警察官に対してそこでは主観的によそ者、あるいは、見知らぬ人でもあるのです、同様にポリツァイは、誰も普遍的な資産あるいは個人の権利をその所有の使用によって侵害しないように監視しているのです。急激な生活の変化に対して、市民生活の窮迫に対して多くの人々になしたところの一時的な行為は軽減されねばなりません。いまや各個人がなさなければならないようなことを、普遍があらゆる個人に代わって引き受けるのです。そしてポリツァイが登場し、私の私的所有の使用が他人をどれだけ侵害したのであろうかということを評価します。しかしこの評価において一定の寛大さが生じなければなりません、なぜなら、もしそうでなければ、ポリツァイが無限に私的所有の使用に介入することができるようになるからです。監督が制限されなければならないところでは、普通の場合なんの限界も規定されていないのです。ポリツァイはひどく憎まれています、というのはポリツァイは非常にこせこせしたやり方で動いており、そして細かな事柄に関係しており、そしてポリツァイは、障害を取り除くというようにたんに否定的にのみ活動し、肯定的には活動しないからです。なんのポリツァイもない諸国あるいは非常に悪いポリツァイのある諸国において、そこではじめて人は良いポリツァイの価値を痛切に感じるのです。なぜなら人は良いポリツァイにまったく気付くことがないからです。そして人はポリツァイが活動しているとは見ないことからポリツァイは讃えられることは

ありません」(192-194ページ)。

私的所有の侵害=犯罪とその阻止に対し、ポリツァイが必要となること、フィヒテの国家論はこのポリツァイの監督を中心的任務におく必要国家であることが委曲に尽くして述べられている。そしてフィヒテの必要国家がプライバシーを侵害する警察国家になりやすい傾向をもつこと、そうした警察国家に対し限界が設けられるべきことが語られている。ヘーゲルの国家—政治的国家論は、フィヒテの国家論=「外的国家」、「必要国家」、「悟性国家」論を内に含みつつもこれを超克したところで築き上げられたものであることが、これらの論述を通じてうかがわれよう。

なお、この政治的国家論に関連して、ヘーゲルは、往々、エタティスト(国家至上主義者)と論難されることがあるが、ヘーゲル自身は「三 国家 (A) 国内法」のうち「(b) 行政権」の「§145」において「国家という巨大な害悪」(254ページ)という認識をその国家観の基底に据えていることをみるならば、単純にエタティストと断ずるわけにはいかないのであって、より立ち入った吟味が求められているといえよう。

上来、ハイデルベルク『法哲学講義』にみられるヘーゲルの市民社会論の注目点をみてきたが、それでは市民社会における諸矛盾はいかにして揚棄されるのであろうか。最後にヘーゲルの革命論を瞥見しておこう。ヘーゲルの革命についての言及は「(b) 行政権」に続く「(c) 立法権」の「§146」に披瀝されている。

「立法権は国家の普遍に関するものであり、一部は本来の法律としてのそれに関するものである、一部はまったく普遍的な国内の統治の事柄としてのそれに関するものである、一部は立憲の根拠に関連してのそれに関するものである、それは即自・向自に存在するが、しかし法律の陶冶形成および普遍的な統治の事柄それ自体の前進的な性格において陶冶形成される。精神の陶冶形成が同様の制度の陶冶形成をとまなわなない場合、それは前者と後者との矛盾に陥

り、不平の源泉であるのみならず革命の源泉でもある」(257ページ)。

この命題に対して、ヘーゲルは講義でこう注釈している。

「憲法は先行するものです、なぜなら立法権が現存するということはすでに憲法のモメントであるということですから、そして立法権はすでに編成された憲法を、しかしそれが直接に立法に現われてくるところの普遍の実態としての憲法を前提しています。憲法は侵すべからざるもの、聖なるものとして根底に存在しなければなりません、しかし憲法は立法に対して、統治権に対して作用を与えるのだから、そこには憲法の精神の形成があります、そして憲法は他の憲法になるのです、実態は立法権の作用によって変化します。もしも精神が向自的に前進し、そして制度が自己を形成陶冶する精神とともに変化しないとするならば、真の不満足が生まれます、そしてこの不満足が取り除かれたいとするならば、平和のこの妨げが生じます、そのことによって自己意識的な概念において他の制度が現実存在します、革命が発生します」(257-258ページ)。

すなわち「精神の陶冶形成」=「精神の向自的な前進」に対する「制度の陶冶形成」の立ち遅れ——「矛盾」が「革命の源泉」となるというのである。ヘーゲルにあっては史的唯物論の予感はあるとしても、なお「精神の陶冶形成」=「精神の向自的な前進」をもたらず原動力にかんしては体系的な理解に達していない理論的限界はおおえないとしても、人間が生産諸力と生産諸関係との衝突を「意識し戦い抜く場面」(杉本俊朗訳『経済学批判』国民文庫、16ページ)がほかならぬ「イデオロギー的諸形態」の場面(同)であることからすれば、ヘーゲル革命論における精神の陶冶・形成=「精神の向自的な前進」の先導性にかかわる立言も一概に觀念論的史観とのみ片づけるわけにはいかないともみてよいであろう。

IV むすび

——待たれる第2回法哲学講義の刊行

本書はヘーゲルの『法哲学』をふくらみをもって理解させてくれる。すなわちそれが重疊的・立体的な層位をもって形づくられていることを——。それゆえ、ヘーゲルと思想的・理論的な影響・交渉関係にあった思想家・理論家の営為をもふくらみをもって理解することを可能にさせてくれ、それらの思想家・理論家の創造が重疊的・立体的な過程であったことを了解させてくれる。マルクスは『資本論』第1巻第2版への「後書き」において自らを「あの偉大な思想家の弟子であることを公然と認め」(前掲、社研版『資本論』I a, 29ページ)た所以も、さてこそと納得させてくれる。

尼寺氏は、マルクスが「ヘーゲルに固有な表現様式に媚を呈しさえした」(同)価値論のうち、もっともその媚がうかがえる『資本論』第1部第1篇第1章第3節「価値形態または交換価値」、いわゆる価値形態論をめぐる久留間鮫造氏『価値形態論と交換過程論』(岩波書店、1957年)以来の論点を深く解明した『価値形態論』(青木書店、1978年)、『ヘーゲル推理論とマルクス価値形態論』(晃洋書房、1992年)の著者である日本でも有数の資本論研究者の一人であるばかりか、『ヘーゲル論理学入門』(鈴木茂他共著、有斐閣、1978年)にみる弁証法、とくに「理念」論への深い理解、G・ビーダーマン『ヘーゲル』(大月書店、1987年)の翻訳の仕事に立って、すでにヘーゲルの『イェーナ精神哲学』の訳業をなしとげ、今回、このハイデルベルグ『法哲学講義』の訳書を完成された。上引にうかがわれるように訳文は平明、ヘーゲルの意をよく汲んだ適切な翻訳となっている。

本書はもともと難解をもって聞えるヘーゲルの『法の哲学』にとって入門書となりうるものであるが、尼寺氏のキャリアが生かされた格好の入門書になっているといえる。

氏は、この訳業に引き続き、現在、ヘーゲルの第二回法哲学講義の聴講ノート—— C・G・

Mar. 2003

G.W.F. ヘーゲル, 尼寺義弘訳『自然法および国家学に関する講義』

47

ホーマイヤーの『1818/19年冬学期講義』の邦訳に取り組んでいるとのことであるが, 一日も早い刊行が望まれる。

(2003年1月17日受理)